

地域コミュニティの再生に貢献する人材育成に関する検討

大野 邦夫[†] 西口 美津子^{††}

日本社会は、少子高齢化、物づくりからサービスへの産業構造の変遷、東南アジアを視野に置くグローバル化、省資源・省エネルギーの循環型社会への移行といった変化に直面しているが、そのような課題に挑戦し問題を解決し得る優れた人材の養成が急務である。しかしそのような人材は既存の組織で評価されるような、学業成績が優秀で組織に適合するような人材とは異質であろう。そのような人材育成の要件として、社会の変革に貢献した歴史上の優れた人材に着目し、先に提案したマトリックス履歴書を用いて分析し、そのような人材の育成方法についての検討を試みる。

A Study on Human Resource Development for Contributing to Regenerate the Local Communities

KUNIO OHNO[†] MITSUKO NISHIGUCHI^{††}

Faced with problems as low birthrate and longevity, industrial structure change from product sales to consumer services, globalization with Asian countries, and recycling society of saving material and energy, Japanese society requires to develop human resources to challenge to solve the problems mentioned above. Those human resources will be different from the people who are excellent in school records and evaluated in the existing organization. To clarify the requirements for such skills, great historical individuals who contributed to the social change have been analyzed through the matrix resume (CV) proposed previously, and the method for such human resource development have been studied and described.

1. はじめに

筆者等は、「高度技術者就業支援と技能伝承」という名称の研究会を開催し、熟練技術者のスキルを明確化して若年者に伝承する手法について検討を行ってきた。先にそのためのビジネスモデルと情報共有モデルについて報告し、新たな履歴書のコンセプトとしてエピソード付き履歴書の可能性について提案した[1]。さらにエピソード付き履歴書を発展させその関連事項を表形式で記述とする手法としてマトリックス履歴書を提案した[2]。本報告では、マトリックス履歴書を過去の歴史上の人物に適用し、その潜在的なスキルを明確化する手法を試みる。今回検討を試みる人物としては、社会の変革や創成に貢献した人物を取り上げる。これは前回のLOIS研とDD研の合同研究会で紹介した循環型社会に貢献し得る具体的な人材のヒントとなり得ると考えたからである[3]。

社会を変革する人物を論ずる以前に、社会の変革という概念を明確化しておく必要がある。とは言え人類の歴史自体、社会変革の歴史と見ることが可能である。我々が歴史を学ぶのは、未来を思考する際に必要だからである。歴史を通じてその進展の普遍性を把握し、その普遍性を現在の世界に適用して未来を予測するのである。四半世紀前に、AIエキスパートシステムというものがあったが、コンピュータに歴史的な事実を網羅的に学ばせて、抽出された歴史的なルールを知識ベース化し、それを現代社会に適用

して将来の社会を推論することは可能であろうか。恐らくは困難であろう。エキスパートシステム自体失敗した技術であり、有用には至らなかったのが現実である。しかし、エキスパートシステムにおける推論技術は、エージェント技術を経由してオントロジ技術に継承され、電子カルテのような医療分野で実用に供されている[4]。ビッグデータが話題になる昨今であるが、Webオントロジ技術をベースとする歴史学は発想されて然るべきであり存在する価値があると思う。

そのためにはRDFやOWLで歴史を記述するという途方もない発想になるが、人間のゲノムをXMLで記述したことを考えれば歴史の記述なども俎上に乗せられる可能性を感じる。特に情報技術の今後の適用領域としては、コンピュータの恩恵に浴している従来理系分野よりは、コンピュータ適用が考えられなかった文系分野に発展の可能性を感じる。従来適用されてきた領域とは異文化の学際領域にICT技術を導入することがデジタルドキュメントといった分野で今後期待される一つの方向性であろう。

2. 歴史と社会のモデル化

2.1 人類の歴史のモデル化

RDFやOWLで歴史を記述することを想定すると、それ以前に歴史をモデル化する必要がある。歴史のモデル化というプロセスは、UMLで記述可能か否かといった議論もあり得るが、現実にははるか以前の漠とした課題である。

古典的には、旧約聖書、ヘロドトスの「歴史」、ツキジデスの「戦史」などが歴史記述の端緒と言われるが、人類

[†] (株) 安土

Azuchi Inc.

^{††} 福島工業高等専門学校

Fukushima National College of Technology

の歴史全体をモデルとして最初に思考したのはヘーゲルであろう。ヘーゲルの「歴史哲学講義」によると、世界の歴史は人間における自由の発展を物語る理性の進歩の過程として記述されている[5]。すなわち、非理性・反理性という矛盾を含む現状が、理性の進歩という歴史の要請と衝突し、その結果激しい闘争が展開される。そのような矛盾を解決するための闘争を通じた展開により新たな歴史の扉が開かれてきたというのが歴史に関する彼のモデルである。

ヘーゲルのモデルに、階級という概念を加え、技術的な進歩が経済を進展させ、その発展を担う支配階級と被支配階級との闘争を通じた発展が人類の歴史であるというモデルへと修正・変更を加えたのはマルクスである[6]。ヘーゲル、マルクス共に、宗教改革からフランス革命、パリ・コミュンに至る西欧世界の抗争による変化を観察して弁証法的な歴史発展モデルを構築しているが、西欧文化という局所的な価値観に基づくモデルであることは否めない。

パートランド・ラッセルは、懐疑論者らしく両者を批判すると思われる視点から、「西洋哲学史」の序文で単純なサイクリックな歴史モデルを提示している[7]。このモデルは、一つの文明（国家や王朝）が、厳格な規律を持って登場し、やがて発展して最盛期を迎え、その後は内部的な抗争などで衰退し、それに代わる厳格な規律を持った別の新たな文明に滅ぼされるというライフサイクルモデルである。このモデルは西欧のみならず中国の王朝の変遷なども適格に説明し得る文明のパターンを提示する。

さらに説得力があって興味深いのは、D・リースマンの「孤独な群衆」によるモデルであろう[8]。このモデルは、工業化というプロセスを人類における大きなエポックとして位置づけ、工業化以前、工業化途上、工業化以後という三つの時代区分に応じてその社会における多くの人々の性格を伝統指向、内部指向、他人指向に大別した。さらにこのモデルの推移は、人口増大のS字カーブに対応すると共に、その社会における支配的な情報メディアについても示唆している[9]。

2.2 社会のモデル化と設計

歴史上の文明は、その社会の維持のために国民や住民に対して道徳やルールを科してきた。近代国家以前は、そのルールは主に宗教により提示されてきたと言える。リースマンはこのような社会を伝統指向社会と名付け、そこで用いられる主要な情報メディアを口承や手書き文書としている。

宗教改革・産業革命後の近代国家においては、国家像が変化した。近代国家における社会モデルは国家と国民との契約がモデルである。そのような国家としての社会的モデルを最初に設計したのは英国人のトマス・ホブズであろう。ホブズは彼の著書である「リヴァイアサン」において、人々は基本的な権利として自由を有するが、自然状態では万人の万人による闘争を生じ、却って生存すら保証されなくなると結論付けた。その対策として個々人の権利を共同体（コモンウェルス）に委託し、自由は制約されてもその配下で生活する方が社会全体では妥当であるとした。

ホブズの思想は、英国の王政側に立つイデオロギーであり、清教徒をはじめとする革命側が受け容れられるものではなかった。ホブズへの批判として、英国のジョン・

ロックとフランスのJ・J・ルソーによる社会契約論が登場した。ロックの「契約論」は、その後英国の名誉革命と米国の独立戦争を支える思想となった。ルソーの社会契約思想はフランス革命の背景思想になった。

日本の近代国家としてのモデルは、明治維新に求められるであろう。幕末から明治維新へ、さらに明治政府の下で、明治憲法の制定に至るプロセスは、非西欧の国家が西欧の技術と文化を背景に近代化した成功事例として位置づけられ、開発途上国における近代化を推進するモデルとして位置づけられている[10]。

3. 人物モデル

3.1 人物モデルの要件と設定

ここでは、新しい社会をデザインした人物のモデルとして、ベンジャミン・フランクリンと福澤諭吉を取りあげる。フランクリンは、独立前の米国で貧しい家庭に生まれ、苦勞して印刷工になり、やがて印刷事業を営む傍ら新聞社を買収し、地域の活動を通じて政治家になり、米国の独立に貢献した[11]。福澤は九州中津藩の下級武士の家に生まれ、長崎に遊学後、大阪で緒方洪庵の適塾に学び、江戸に出て幕府に仕えた。その間に咸臨丸に乗船する機会を得て米国に行き、米国社会を観察して後に現在の慶応大学の前身である慶応義塾を設立した。明治維新後は敢えて中央政府に仕えることを拒み、平民の教育者として社会に貢献する道を選んだ[12]。

米国の独立であれば、ジョージ・ワシントン、トマス・ジェファソンといった政治家もいるが、市井の生活者として苦勞しながら来るべき社会を考え、多様に活動した点に関してはベンジャミン・フランクリンが適格であろうと思われる。

明治維新の立役者という意味では、西郷隆盛、坂本龍馬、大久保利通、伊藤博文といった幕末の志士や明治の元勳が存在する。しかし非西欧の開発途上国が西欧の技術と文化を摂取することを通じて近代化を推進するという観点で、その本質を把握し人々に知らしめたのは福澤諭吉の右に出る者はいないであろう。

以上から、ここではベンジャミン・フランクリンと福澤諭吉を取りあげる。この二人は共に自伝を執筆していることから、生涯に関する自らの意思が語られていることも参考になると思われる。

3.2 マトリックス履歴書

社会変革者としてのベンジャミン・フランクリンと福澤諭吉のスキル獲得過程を、マトリックス履歴書により記述したいと考えるが、その前にマトリックス履歴書について説明する[2]。一般の履歴書や職歴書は、時系列的にシーケンシャルに記述されている。日本の場合は過去から現在に、欧米の場合は現在から過去にという相違はあるが、マトリックス履歴書は、記述される履歴・職歴を上から下へ記述するのではなく、表形式として左上から右下へ記述する。その結果基本的な履歴は表の対角線上のブロック内に記述される。さらに継続する期間毎の業務内容の関連を図1のようにマトリックス的に展開して記述すると相互に

関係する内容を把握したり新たに発見することが可能となる。

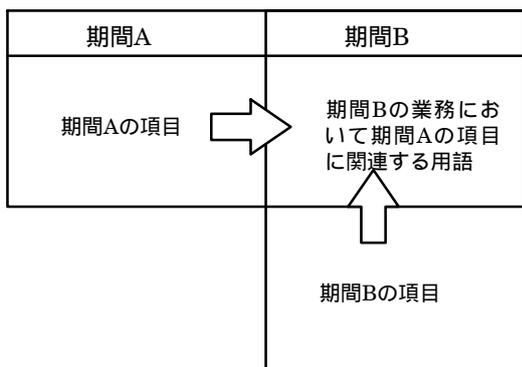


図1 マトリックス展開による関連項目記述

連続する期間AとBについて、一般の履歴書だと上から下に同列に連続して記述してしまうところを、逐次右側の列に段違いに記述していくのである。そうすると、期間Aの右側には空間が生じることになる。この空間に期間Aの項目に関連・対応する期間Bの関連用語を記入するのである。以上の手法で、期間毎に習得したスキルが、以後のキャリアにどのように生かされたかが明確化される。

マトリックス履歴書から、ある期間の潜在的スキルやモチベーションが以後のキャリア設計や実践にどのように生かされたかを知ることが可能である。図1では、後の期間の職務の概要項目やエピソードから、前の期間の関連用語を抽出したが、その用語群は潜在的には前の期間に既に習

得されていたのかもしれないし、その潜在的なスキルはモチベーションとしてその人の人生を推進するトリガーとなっていた可能性がある。それを図示すると図2のようになる。

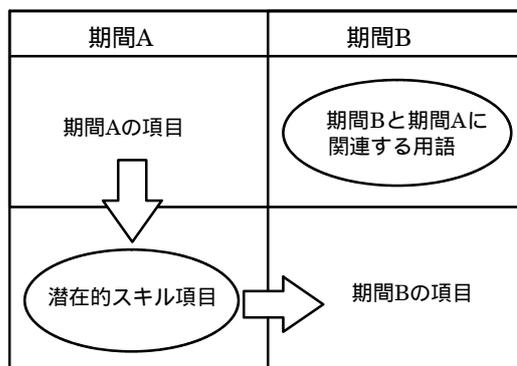


図2 マトリックス展開と潜在的スキル項目

右上の「期間Bと期間Aに関連する用語」は、後の期間から前の期間を振り返って思いつくるのであるが、左下の潜在的スキル項目は、これを明確化しておけば次の職務の選択に活用することが可能になり、以後のキャリア設計に生かせることを意味する。

3.3 ベンジャミン・フランクリン

以上の手法で作成されたベンジャミン・フランクリンの若い時期のマトリックス履歴書を図3に示す。フランクリンは1706年にボストンで生まれた[11]。父親のジョサイア・フランクリンは獣脂ろうそく製造を行っていた。当初

	1714 8	1715 9	1716 10	1718 12	1719 13	1724 18	1726 20	1729 23
ラテン語学校 識字才能 語学習得					印刷物への関心			仏語、伊語、西語習得
	ブラウネル氏の学校 読み書き 算術		読書好き・天路歷程	印刷物への関心 「灯台の悲劇」執筆 算術書(コカー)	「自由と必然」執筆	簿記習得		「お節介屋」執筆
		父の手伝い 織物・石鹸作り 店番・使い走り 船乗希望・水泳 公共精神	徒弟制度的習得力 実践勤勉精神	科学的思考 航海・幾何学	植字技術の習得 水泳の芸当 巡回文庫	簿記習得	ジャントー・討論会	共同図書館
			刃物職 熟練職人・道具の興 独立精神	科学的思考	植字技術の習得	活字製造 簿記習得		
		公共精神		印刷職人 印刷技術習得 J. コリンズと議論 スペクテイター紙 レトリック習得 葉食奨励 フィラデルフィアへ	批判精神 ジャーナリズム精神 執筆活動	活字製造		社説執筆
		公共精神	独立精神	印刷技術 印刷技術	ロンドンで印刷工 バーマー印刷所 ウォッツ印刷所 信仰深い女性	実践的人脈形成力 実践的人脈形成力 実践的人脈形成力 道徳倫理観形成		13徳の樹立
		公共精神	実践勤勉精神	印刷技術 印刷技術		印刷屋開業 簿記習得 活字製造 銅版印刷機成作 ジャントー・討論会 紙幣印刷		組織論 「紙幣の性質と必要」
		公共精神	独立精神		ジャーナリズム精神			新聞事業 ベン・ガゼット買収 図書館の企画 13徳の樹立 修得同盟の企画 「リチャードの盾」
			実践勤勉精神	科学的思考	批判精神			

図3 ベンジャミン・フランクリンの前半生におけるマトリックス履歴書

父親は彼を聖職者にしたいと考え8歳でラテン語学校に入学させたが経済的事情で翌年には地元の学校に変わっている。彼の読み書き算術能力は卓越していたという。

その後10歳で父の仕事を手伝うようになり店番や使い走りなどを上手にこなした。水泳が上手で将来は船乗りになりたいと考えたようである。12歳で刃物職人に弟子入りしたが長続きせず、翌年には兄が経営する印刷会社に雇ってもらう。この仕事は気に入って、自分でも著作物を執筆し出版したりするようになる。だが兄とはうまく行かず、意を決してフィラデルフィアに出奔する。フィラデルフィアで印刷工としての職を探すが、その過程で英国での仕事を見つけ、ロンドンで印刷工としての腕を磨くとともに、先進の英国での仕事のやり方を覚え、友人や尊敬すべき人物に出会う。

2年後にフィラデルフィアに戻り、印刷工として働きながら簿記などを学んで自ら印刷事業を興し新技術の開発、

公的分野への進出を図りつつ資本を蓄積する。3年後には新聞社を買収し新聞の発行を手がけるようになるとともに、自らも主筆として執筆し言論活動に乗り出すといったことを30歳までに行っている。

その後は、フィラデルフィアの市議会・ペンシルヴァニアの州議会の議員になり、政治家として活躍して米国の独立に貢献することになった。

3.4 福澤諭吉

福澤諭吉のマトリックス履歴書を図4に示す。福澤は1835年に九州中津藩の下級武士の家に生まれ、武家としての厳しい環境に育つ。フランクリンと同様に読み書きに優れ体力にも恵まれて武道にも秀でていた[12]。

しかしその制度的な環境に対して反発する。便所でお札を踏んづけてみたり、神社の神体となっていた石を取り替

	1836	1854	1855	1858	1860	1861	1862	1867
	1	19	20	23	25	26	27	32
中津時代 神仏への反逆精神 武道に秀でる 書籍を読む	軍事への関心	批判精神 写本のスキル	好奇心 塾長に抜擢	米国社会の把握 軍事力の認識 米国書籍の購入	欧米制度の把握	欧米制度の啓蒙 香港での植民地文化		政治への距離
長崎遊学 オランダ語の習得 砲術図面の習得 薩摩の関係者と面識		翻訳のスキル 製図のスキル	語学への興味 佐久間象山の砲術学	英語訳スキル 軍事力の認識	欧米技術力の把握		薩英戦争の把握	
		通塾 築城学の写本と翻訳 化学実験を行う 物理・電気も学ぶ	科学的精神	蒸気船の知識	欧米技術力の把握	「西洋事情」		「学問のすすめ」
		江戸 蘭学塾を開設 佐久間象山の砲術学 英語の習得	科学的精神 好奇心	軍事力の認識 英語の活用	蘭学塾から英学塾へ	香港での植民地文化 幕府公文書の翻訳		慶応義塾の開設
			科学的精神 好奇心	渡米 咸臨丸への乗船 米国社会の把握 木村梧津守との親交	欧米文化の把握 勝海舟との反目	「西洋事情」		経済学の講義
			英語の習得		英学塾 ウェブスターの活用 「増訂華英通語」出版 幕府公文書の翻訳	翻訳スキル 訳語の整備 幕府外交文書の翻訳		
		批判精神	好奇心 科学的精神	英語の活用 軍事力の認識 英語の活用 英語の活用	欧米文化の把握	幕臣として 文久遣欧使節に随行 香港での植民地文化 ロンドンの万国博覧会 欧州の技術制度把握 「西洋事情」執筆 幕府外交文書の翻訳 訳語の整備		経済学の講義
		批判精神	好奇心		欧米文化の把握			明治維新 慶応義塾の開設 経済学の講義 新政府出仕を断る 「学問のすすめ」

図4 福澤諭吉の前半生におけるマトリックス履歴書

えてみたりしている。その背景には懐疑主義による科学的精神があり、福澤の生涯は一貫してこの精神に貫かれている。19歳で長崎に遊学するが、この出奔は中津藩の文化における身分制度への批判が基になっている。「門閥制度は親の敵でござる」という言葉がこのことを象徴している。とは言え藩と絶縁するのではなく藩の組織の配下でその後も活動する。このあたりが幕末の志士である吉田松陰門下や坂本龍馬とは違うのである。

長崎で中津藩が関係する砲術関係のオランダ語文書に接し、持ち前の読み書き能力でその文書管理を担当し蘭学の初歩を身につけてしまう。その翌年に大阪に行き、緒方洪庵の適塾の塾生となり蘭学を修めている。その間に持ち前の能力で塾でもリーダーシップを取り、やがて塾長までになってしまう。

その後江戸に出るが、蘭学はもはや学ぶべき対象ではなく教える側になった。さらに国際情勢を把握して英語の習

得に励む。やがて習得した英語の能力が福澤に絶好の機会を提供する。咸臨丸による渡米である。この渡米により福澤は米国の生きた文化を体験する。

咸臨丸による渡米後も福澤は中津藩関係者として幕府の仕事を担当する傍ら、英学塾を開設するなどして日本における英語の普及活動を行う。やがて文久遣欧使節に随行する機会を得て、ロンドンの万国博覧会を見聞する。咸臨丸で知った米国文化よりもさらに先進の欧州文化を知り、その見聞に基づいて執筆された「西洋事情」は幕末の日本に重要な情報をもたらした。

その後明治維新となり、政治権力は幕府から明治政府に移管される。その時に福澤は慶應義塾を開設し、英語と経済学を日本の有能な人材に学ばせることを事業とした。彼の有能さは、明治政府も認めるところであり、政府への出仕を度々依頼するが福澤はそれを頑なに拒む。門閥制度を憎んだ福澤は、権力による上からの改革よりは、実力ある

個人を通じた現場からの社会の構築を志したからであろう。

3.5 フランクリンと福澤の比較

フランクリンと福澤両者の前半生を比較すると、時代や場所は異なるが、以下のようにかなり似ている面が多いと感じられる。

• 基礎的学力

共に読み書き算術のような基礎的な学力に優れていた。フランクリンの場合は、それが父の仕事、兄の仕事などを助けることにより、社会的な付加価値を付ける労働の価値を理解させた。福澤の場合は中津藩の中で能力に対する自信を付けさせ、長崎では砲術の文書の管理を可能にした。

• 独立精神

共に、他人や組織に頼らず独立心が旺盛である。フランクリンの場合は、兄に対する反感からフィラデルフィアで自立する志を持たせた。福澤の場合は藩の身分制度への反感から長崎遊学を志した。

• 科学的思考

宗教や権威に批判的で、事実に基づき検証する精神が旺盛である。フランクリンは印刷技術を科学的に把握していたので、その後活字の作成や銅版印刷といった新技術を実現し、後に雷が電気現象であることの実証などを行った。福澤の場合は、神様のお札や神社の神体の事件で分かる通り、宗教的権威には批判的であった。その後、砲術や築城技術のような蘭学や洋学に基づく技術への関心、蒸気船への関心など科学的な好奇心は旺盛であった。

• 経済学的知識

共に経済学的知識に関心を持ち、社会の経済的な発展に関する知識に秀でている。フランクリンはロンドンから戻って簿記を習得し自らの印刷事業を興し、その事業を新聞や図書館といった分野に拡大しているがその背景には経済学に基づく市場把握が先行している。福澤の場合は、西洋が強大になった重商主義を経済学的に分析し、慶応義塾を起こし、日本の近代化に貢献する人材を育成している。

• 語学力

共に外国語の習得には熱心であった。フランクリンは、フランス語、イタリア語、スペイン語を習得し、福澤は漢文、オランダ語、英語を習得している。

• 執筆力

共に執筆力に優れ、自分の思想を社会に紹介している。フランクリンは、印刷工の時代から自分で文章を書き、その出版に喜びを見出していたようであり、福澤の場合は洋書の写本や翻訳を通じて執筆力の必要性・有効性を認識し、「西洋事情」や「学問のすずめ」などの当時としてのベストセラー書籍を執筆している。

• 情報発信力

フランクリンは情報発信のための印刷分野の専門技術がその後の彼の幅広い活躍分野をカバーし、福澤は塾を通じた新分野の教育者としての情報発信スキルが、その後の幅広い活躍を可能にした。

4. 地域コミュニティの再生に貢献する人材

4.1 地域コミュニティを取り上げる理由

フランクリンは米国の独立、福澤は明治維新という国家レベルの新しい社会の設立に貢献した。国家レベルの社会構築に貢献した人材のスキルが地域コミュニティの再生とのレベルに対応するかという疑問が存在するであろう。ここではそのことを考察したい。

社会の設計は基本的にトップダウンで行わざるを得ない。そもそも設計という概念が、設計目標という最上位の概念があり、それを実現するための部分概念を演繹的に設定する。そのように考えると、大規模システムの設計と類似な面を持つ。

他方、社会の設計は、利用者としての住民のニーズを十二分に反映させねばならない。そのためには民主的なプロセスが必要であるが、国政レベルの民主的なプロセスは政党レベルの多様な政策とその実現手法が無秩序に議論されるために効率的ではない。そのために、住民のニーズが絞り込まれて明確化される地域コミュニティレベルの方が、社会の設計という概念に馴染むと思われる。

4.2 社会の設計と設計者のスキル

将来の社会の設計に携わるような人材は、既存の組織や体制で活躍するような人材とはかなり異質のスキルを要求されると考えられる。既存の組織や体制が要求するニーズと、将来の組織や体制が要求するニーズとは同一ではないからである。

そのような相違について考察した研究者としては、カール・マンハイムが挙げられる。カール・マンハイムは、既存の組織や体制が要求するニーズに基づく思想をイデオロギーと名付け、将来の組織や体制が要求するであろうニーズに基づく思想をユートピアと名付けた[13]。

マンハイムは、大衆を主体とする民主主義社会における知識人の役割を論じているのであるが、その考え方は今日のコミュニティ設計に役立ち得るのではないかと考えられる。マンハイムが提起したユートピアは外形概念だけで実体が乏しいと感じられるが、フランクリンや福澤は、その部分的な要素を提示していると思われる。

彼らの共通のスキルと考えられる、基礎的学力、独立精神、科学的思考、経済学的知識、執筆力、語学力、情報発信力は、将来の社会の基本設計を提示する上で極めて重要と感じられる。

その中でも、独立精神と科学的思考は、既存のイデオロギーや不当な既得権を批判し、よりよい社会を想定するために必要なスキルである。経済学的知識は、富の創成と市場を通じたその分配の関係を把握すると共に、社会変化が技術の進展とその産業構造への反映によって生じるという視点を理解する上で重要である。語学力は、自国のみならず、世界を幅広く知る上で重要である。執筆力・情報発信力は自分の思想やアイデアを多くの人に伝達するために必要である。

上記の視点は、フランクリンと福澤論者から関係付けた結果であるが、将来の社会のニーズを先取りし、社会全体に価値観を広めさせるために有効なスキルと言えるであろう。

4.3 現代社会への適用

フランクリンは18世紀、福澤は19世紀に活躍した人材であり、21世紀の今日にその手法をそのまま適用するには限界があるかもしれない。その考察は前回の循環型社会における人材育成の報告における検討が参考になるであろう。前回の検討では、循環型社会が要求する人材は省資源・省エネルギーというドメイン知識のスペシャリストと、そのようなドメインに強いジェネラリストと規定した。さらにジェネラリストに関しては下記のような項目への理解を要件と考えた。

- (1) 生活環境の電子化・ネットワーク化
- (2) 地域コミュニティの設計とICT支援
- (3) 地域における交通移動手段への認識
- (4) 法制度的知識と標準化戦略
- (5) 世界史的な視野

フランクリンと福澤諭吉から関係付けられた「基礎学力」「独立精神」「科学的思考」「経済学的知識」「語学力」「執筆力」「情報発信力」に比べると、個別的な知識・スキルという観が強いが、対立的な概念ではなく、相補的な概念と考えて良いであろう。

• 基礎学力

フランクリンも福澤も紙の上にペンや筆で筆記する時代であり、教科書や書籍も極めて貴重な時代であった。それに比べると現在は多様な優れた教科書、参考書があり先の「生活環境の電子化・ネットワーク化」に起因して学習環境は格段に進歩している。しかし、学習環境の改善が習熟の高度化を意味するわけではない。学習のモチベーション、モチベーションを高める教育が課題であろう。

• 独立精神

フランクリンの家族はプロテスタントを信仰していた(母方はカトリック)ので、ニューイングランドのピルグリムファーザーズの伝統で自由な精神の家庭であった。福澤の家庭は下級武士であったが自由な振舞いを許していた。当時に比べると今の世の中は、TVやマスコミの影響力が強く、学校や地域社会で周囲への同調を強制される面がある。そのような問題を克服して、独立精神を養うには、「法制度的知識と標準化戦略」や「世界史的な視野」を習得する必要があると思われる。

• 科学的思考

フランクリンや福澤の時代に比べると数学、理科、情報などの教科が充実しているので、知識としては容易に習得可能である。しかし、その知識を活用するモチベーションは、フランクリンや福澤諭吉の時代に比べると勝っているとは言えない。受験勉強による知識は、受験が終わると忘れ去られてしまうようで、身に付かない場合が多い。そのような面で、地域コミュニティの設計を志す人は、「生活環境の電子化・ネットワーク化」や「地域における交通移動手段への認識」等の背景知識を持つ必要がある。

• 経済学的知識

アダムスミスの「国富論」しか存在しなかったフランクリンや福澤の時代に比べると、今日の経済学は数学をふんだんに使用して多様に体系化され、習得はむしろ困難になっている。今日的には、数学モデルによる経済学よりは経営学やMOTのような分野の方が実用であろう。

• 語学力

一部のエリートしか学べなかった昔に比べると、語学教材や語学学校は一般化しており、習得は容易である。

• 執筆力

ペンや筆で書いた時代に比べ、キーボード入力で効率的に文章が作成出来るようになっただけでなく、修正や編集なども極めて容易になった。

• 情報発信力

フランクリンや福澤の時代は、印刷技術を活用できる人が情報発信力を持てる時代であった。印刷媒体を流通させるには、書籍、雑誌、新聞などの流通システムが必要であり、フランクリンはこの世界の専門家であったことが彼の活躍を可能にしたと言える。福澤の場合は慶応義塾という教育機関を通じて、さらに弟子を通じて情報発信を行ったと言える。今日では、新聞、テレビといったマスメディアが情報発信機能を提供し、世の中に対して絶大な影響力を行使しているが、インターネットによるSNSやブログのようなパーソナルメディア、コミュニティメディアも進展しつつある。このような新しいメディアを活用することが、今後の社会の設計には重要である。

4.4 国家と地域コミュニティ

今後の社会の目標を、安心・安全・快適といった生活環境に置き、さらに省資源・省エネルギーを目指す持続可能な循環型社会に置くとすると、国家というレベルの社会設計よりは地域コミュニティをカテゴリとする設計の方が現実的であろう。

国家を対象にすると、過去の歴史的な背景やイデオロギーが必然的に関係し、実践的な生活とは隔たったレベルの議論が沸騰することになりがちである。しかもその議論を通じて得られるものは少ない。特に外交レベルの議論や紛争では、ある国にとって愛国心が満たされるかもしれないことは相手国にとっては屈辱と反感でしかない。イデオロギーや宗教的感情が関係すると相互にWin・Winになることはあり得ない。結局、問題の棚上げくらいしか妥当な解決法は困難であろう。

然らば、フランクリンや福澤が米国の独立や明治維新という国家レベルの社会の設計に参加できたのは何故かということになる。それは国家の方向性の議論に参加できる人間の数が限られており、しかも工業化という進むべき方向性が明確であったからである。要するに第一次産業から第二次産業への移行の時期であり、工業化というプロセスに関しては英国を始めとする先行モデルが存在し、それをお手本にして合意を取れば良かったのである。

しかし、現在の日本は第二次産業から第三次産業への移行の時期であり、第三次産業としてのサービス業のあり方に関しては一様ではない。北海道から九州・沖縄まで地域ごとにサービスへのニーズは異なるし、人口集中の進んだ大都市と過疎に悩む村落でもサービス業のあり方は大きく異なるのである。従って地域コミュニティごとに将来へ向けての社会の設計方針は異なり、コミュニティごとに再生計画が存在するのが自然である。

5. まとめ及び考察

5.1 要約

以上、地域コミュニティの再生に貢献し得る人材の要件を探求するために、過去に來るべき社会の設計に貢献した米国のベンジャミン・フランクリンと日本の福澤諭吉を具体的人材として取りあげて検討した。先ず2章では地域コミュニティの再生のための設計という概念を明確化するために、歴史と社会に関するモデル化という概念について、ヘーゲル、マルクス、ラッセル、リースマンの思想を紹介して検討した。3章では、過去に具体的に社会の設計という観点で優れた業績を挙げたと思われるベンジャミン・フランクリンと福澤諭吉について、以前提案したマトリクス履歴書を用いて分析し、共通に見られるスキルとして、「基礎学力」「独立精神」「科学的思考」「経済学的知識」「語学力」「執筆力」「情報発信力」を取りあげた。4章では、フランクリンと福澤から得られたスキルを現在の時代に対応させるための分析を行った。

5.2 人材の育成法

フランクリンと福澤に見られる基礎学力、独立精神、科学的思考、経済学的知識、語学力、執筆力、情報発信力といったスキルを有する人材を、将来の地域コミュニティ再生をゴールとしてどのように育成するかが課題である。フランクリンと福澤に時代と、現代との相違を4.3節で検討したが、その具体的な実践法が検討されねばならない。

・基礎学力

義務教育期間における課題と考えられるが、生まれつきの素質、家庭環境、地域や国家としての文化的要因も大きいと考えられる。日本の場合は受験教育がもたらす影響が極めて大きいと考えられる。受験教育は試験による学力の序列が問題となるので、真の基礎学力を鍛える教育とは言えないであろう。だが受験教育の序列が基礎学力と関係することは十分に考えられる。受験勉強に努力して良い成績を取る者と受験勉強をしなくても良い成績を取る者がいれば、後者の方が基礎学力はあると考えることはできるであろう。

・独立精神

フランクリンと福澤に見られる自ら属する組織や体制について、その権威に盲従することなく自由に批判的に思考するスキルである。これは個人の資質だけでなく、属する社会がそれを許容する文化にも関係する。従って見方を変えたとエーリッヒ・フロムが「自由からの逃走」で記述している自由な人間としての資質である。デイヴィッド・リースマンが孤独な群衆の中で定義した「内部指向」という社会的性格はこのスキルに対応する。要するに第一次産業から第二次産業への推移である工業化が進展する際に出現するその背景的な性格である。フランクリンと福澤も工業化社会の設計に寄与する立場で貢献しているので、リースマン的には内部指向の先導的な存在として位置づけることが可能であろう。孤独な群衆の中で、リースマンはさらに、適応型、自律型、アノミー型という性格類型を提案している。この類型は工業化以前の「伝統指向」から工業化後の「他人指向」まで時代を通じて出現する性格である。その中で自律型は独立精神に対応する性格であると考えて良いであろう。適応型が既得権擁護の体制派であり、

自立型はそのグループへの批判者である。以上から、独立精神を明示的に教育で教えることは困難と思われるが、強いて挙げると、リベラルアーツに含まれるであろう。ロバートハッチンスは、リベラルアーツの習得のために古典的な名著を読むことを推奨したが、このあたりに独立精神を涵養する基本があるのかもしれない。

・科学的思考

科学的知識を有していることと、科学的思考が可能なことは同じではない。受験勉強で科学的な教科で優れた点数を取る者が、オリジナリティを要求される特許や論文を必ずしも書ける訳ではない。科学的思考は、普遍的な真理を追究する価値観に根ざしていると考えられ、そのような観点では既存の知識、体制、習慣などの全てに好奇心と批判を抱く懐疑主義に通じるものであろう。若かりし頃に宗教に批判的な精神を抱いた福澤は明らかにこのスキルを有していた。印刷工の時に活字を創成し銅版印刷を工夫したフランクリンも同様であり、彼は後に風を揚げて雷が電気であることを実験的に確認している。

・経済学的知識

小遣い帳や家計簿の世界から、マルクス、ケインズ、サミュエルソン、ハイエクといった本格経済学の領域まで、この分野は幅広いが、社会の動きは経済が握っていることは事実である。現在のグローバル経済はモデル化不能なほど複雑多岐な状況であるが、これを抜きにしては地域経済、地域コミュニティ設計も不可能である。とは言え経済学の専門家ですら正確なモデル化が不可能な状況で、深入りすることは実用的とは言えない。先に述べたとおり経営学や技術経営といった観点で、社会現象に対する視点だけは明確化するスキルを持つようにするのが妥当であろう。

・語学力

日本の公的教育における英語教育が使い物にならないという批判が強いが、これは受験教育に責任があると思われる。中学・高校の英語教育への批判から、より広範な評価を行うTOEICなどへの関心も高いが、TOEICの点数が高いからと言って英語によるコミュニケーションのスキルが必ずしも高いわけでもない。むしろ語学力は異文化への関心や理解への欲求が基本であろう。また今後のアジア諸国をはじめとする開発途上国との交流を考えると、これらの国々の語学の習得も重要であろう。地域コミュニティも、途上国の人々を受け容れた社会設計やコミュニティの再生が図られるべきであろう。

・執筆力

執筆力は、文章記述力であるが、それは記述する能力というよりは内容の問題である。従って文章内容記述力と言うべきものであろう。自己流の文章よりは、他人からのコメントや修正をもらった文章の方が当然優れている。そのような意味では、優れた教師による添削が好ましい。魯迅の「藤野先生」は、彼の文章記述に朱を入れてくれた日本人の恩師に関する著書であるが、魯迅の日本語執筆力にとって重要な意味があっただけでなく、彼の自国語にとっても意味があったと思われる。魯迅はかつて日本で学んだ留学生であり、中国で尊敬される文豪であるが、中国人から尊敬された日本人も少なからず存在した。まともな執筆

力を付与するには、当人のアイデアや記述内容力と共に朱を入れる教師が必要である。執筆力の育成は、朱を入れることによるレトリックの教育である。レトリックに関しては、アウトラインや内容の展開法といった観点も重要であり、その点に関しては英文のレトリックは参考とすべきであろう。

・情報発信力

情報発信力は、電子媒体の登場と共に急速に変化した。テレビに関しては、マーシャル・マクルーハンが分析をしている。これは印刷やラジオというものを、受信者が参与することが困難なホットなメディアという位置づけにしているのに対し、テレビを受信者の参与を可能にするクールなメディアとしたことに特徴がある。

これは、記述された文字や語られる文章の語彙的な意味よりも、映像が提供する視聴覚による感覚的なコミュニケーションを参与性として特徴付けている。インターネットによる個人を明確に識別する通信は、テレビのクールをさらに上回る参与性を実現する。これはSMTPによるEメールという文章情報から、携帯電話によるユビキタス環境、WebによるSNSやブログ、ツイッターといった新規メディアの登場により、個人人の参与性はさらに高まったと言える。他方、匿名の大衆であったマスメディアの受信者が、EメールアドレスやSNSのIDを持つことにより、識別された受信者となり、さらにIPアドレス、MACアドレスを探索されることにより、本人の意図とは無関係に匿名性が失われつつある。これは監視カメラの普及なども含め、媒体の電子化が監視社会化を意味することになりかねない。ローレンス・レッシングが「CODE」の中で、自由を確保するためには、ある種の制約が必要と述べたことが現実になりつつあることを実感する[14]。社会の設計を試みる人材は、このような問題に対する解答も視野に入れる必要があるだろう。

6. 今後の課題

以上、地域コミュニティの再生に貢献し得る人材についての要件を検討したが、先に検討した循環型社会の課題も含め、今後はこのような人材を育成するための具体的な方策を検討したいと考える。5.2節で述べたとおり、独立精神といった要件は、おそらくは科学的思考、経済学的知識といった要件と共にリベラルアーツがカバーすべき分野であろう。戦後の米国教育使節団と占領軍により勧告された新制大学における一般教養が殆ど機能しないで葬り去れた状況を考えると、リベラルアーツ関連の教育は今後も困難が予想される。そのためには、戦後の高等教育自体を分析する必要がある。

戦後の日本の高等教育は大衆化されたが、それは優れた大学への入学を目指す受験教育の結果でもある。名の通った大学に入学できれば、待遇の良い官庁や大企業に就職することが可能であり、特に実力があるのに学歴で苦労するような親は、子どもを優れた大学に入学させることを望んだのであろう。しかし希望者の大半が大学に入学できるようになった現在、高等教育の意味が改めて問われねばならないであろう。一般教養の目的は、全ての大学生に社会人として、よき市民としての常識や倫理を学ばせることが目

的であったが、今後の社会をデザインするような人材のための少数精鋭的な方針と手法で独立精神や科学的思考、経済学的知識などの教育が実現されなければならないと思われる。さらにそのような少数精鋭のリベラルアーツを指向するような専門分野の学会も設立されて欲しい気がする。

7. おわりに

ベンジャミン・フランクリンと福澤諭吉のマトリックス履歴書を通じて、彼らが米国の独立や明治維新という社会変革に対して影響力を持ちえた要因として、基礎学力、独立精神、科学的思考、経済学的知識、語学力、執筆力、情報発信力といったスキルを抽出した。さらにこれらのスキルを、先に検討した循環型社会が要求する人材の適性に対応付けると共に、現在の社会および今後の地域コミュニティの変革や創成のためのニーズに関係付けることを試みた。この手法をさらに多様な人物に適用することを試みたいと考えている。

本研究を行う上で議論に参加頂き種々の示唆を頂いた高度技術者就業支援と技能伝承研究会参加者、職業能力開発総合大学校、および異文化コミュニケーション学会(SIETAR Japan)の関係者に感謝します。

文献

- [1] 大野邦夫; “専門家的人物像を通じた技能伝承を支援する文書共有ならびに活用の研究”, 情報処理学会研究報告, DD85-3 (2012.3)
- [2] 大野邦夫, 西口美津子; “マトリックス方式による履歴書情報の評価とキャリア設計の検討”, 情報処理学会研究報告, DD89-7 (2013.3)
- [3] 大野邦夫, 西口美津子; “循環型社会に向けた人材育成とICT技術の活用に関する検討”, 情報処理学会研究報告, DD90-3 (2013.7)
- [4] 和田康, 大野邦夫; “オントロジモデルに基づく電子カルテとアーキタイプ”, 画像電子学会VMA研究会ワークショップ資料 (2102.11)
- [5] ヘーゲル(長谷川訳); “歴史哲学講義(上・下)”, 岩波文庫, (1994)
- [6] マルクス(武田等訳); “経済学批判”, 岩波文庫(1990)
- [7] パートランド・ラッセル(市井訳); “西洋哲学史1”, みすず書房(1970)
- [8] リースマン(加藤訳); “孤独な群衆”, みすず書房, (1961)
- [9] 大野邦夫; “ドキュメント文化と社会的性格~D・リースマンの思想に基づく考察.” 情報処理学会研究報告DD63-9 (2007)
- [10] ハーバード・バッシン(国弘訳); “日本の近代化と教育”, サイマル出版会(1969)
- [11] ベンジャミン・フランクリン(松本・西川訳); “フランクリン自伝”, 岩波文庫(2007)
- [12] 福澤諭吉, “福翁自伝”, 岩波文庫(1987)
- [13] カール・マンハイム(鈴木訳); “イデオロギーとユートピア”, 未来社(1968)
- [14] ローレンス・レッシング(山形・柏木訳); “CODE”, 翔泳社(2001)